

倚る緯。晦。暁。有バ外面へ走登。児童輩を集て竹木の應手ありしを
振散。合戦ありと呼起つりつも自身へ大ね嘗。堆丘小立躰夥の
童輩ふ指揮あり。這がるあふ寺中の僧徒。日吉丸を傍寄り。志
をく。所懲をとりども。毎に賛く返答して。責利こと毎く
き。ム年よりて朝哉等狂心の隨々勤靜けり。是ハ十二歳の時より
ト。彩は法事の式ありとて。供物を奉堂へ運へ。中央机の筋より
も。十方不背の佛は對し。子ハ他の苦患を救。本願ありと
き。所つるが。恁まで蹴踏つけよ。瘦きよ一亂もあらん。我齋未
く。供餅を服せよ。傍く著来得せんと。大音声よのしよ
て。志をく。着護り居て。頬て洞の燭臺捨把。うんぢ仏院
の音せあり。我供養せば受ける。す怪きりといふ采は燭臺振

楊撲他とう。年最古き木像の。仰く入りてねる。後光四方と
散乱。弥陀の御首の合木の膠。難きて瓦礫多く碎く。這振るに
法子輩。みふごとにひやと並來り。這所爲る。驚顕。喧りくふ
所見や。様めぐ大變爲費。いづれ做んと衆口ふ惶徊る法
子あれ。劇く和尚ふ若あり。上人も。亦孩き。弥陀堂上ふ走り来
て。遠所居をつと稍半晌。呆て辞もう。一ヶ黙念。一ヶ
つ。日吉丸よ宣ふや。卒考を破却。一ヶ黙。是罪勿論。わうう。だ。
呵るに途々。城の人に出を抱を失ふ。唯這うへひづせん。快親
巷へ送り返さん。傍引の人を招けと。明神街ある源左衛門。是をよび
よ。日吉丸。走所作語り。這児奇き。生きしが。四年若
育せ。う。恁て。勿々力暨。一旦ぬまうに。う。未采。ころも